

複雑なパネル表面形状に伴うサッカーボールの空力特性

Aerodynamic characteristics of soccer ball with complex panel surface geometries

多田 海斗¹⁾

指導教員 伊藤 慎一郎²⁾, 濱尾 和哉²⁾, 平塚 将起²⁾

1) 工学院大学大学院 工学研究科 機械工学専攻 スポーツ流体研究室

2) 工学院大学 工学部 機械工学科

キーワード: drag crisis, soccer ball panels, separation, particle image velocimetry analysis

1. 緒言

近年、サッカーボールのパネル表面形状は、従来の5角形6角形で構成されるパネルと大きく異なり、ボールの表面の形状とデザインが変化している。そのため、サッカーボールに関するさまざまな空力研究が報告されている。Alamら^[1]は、異なるパネル形状によるいくつかのサッカーボールの無回転の空気特性の違いを報告した。しかし、溝の形状とドラッグクライシスの Re 数領域の空力特性との関係はまだ明らかになっていない。本研究では、異なるパネルの空力特性の違いを調査し、溝形状とドラッグクライシスの関係を確認した。また、ドラッグクライシスが起こる Re 数がパネル形状によって異なる原因を解明するために2D-PIV計測を行った。

2. 研究方法

本研究において、Table 1に示す14球種を使用した。

2. 1. 流体力計測

抗力測定は、風洞と3分力計を用いて、Table 1に示す、異なる11種類のサッカーボールで実験した。サンプリングは、コンピューター制御の下で1 m/sごとに風速3~29 m/sまで、9.0 s間で1000 Hzで行い、実験値は平均した。

2. 2. 溝計測

各ボールのパネル接合部の溝の断面積は

KEYENCEの3D形状測定装置を用いて測定した。溝の長さは、すべての溝にひもを入れて測定した。溝体積は溝の長さと断面積の積で求めた。

2. 3. 2D-PIV計測

亜臨界、臨界、超臨界領域で剥離点を可視化するために、流れの円周方向で2D-PIV(2次元粒子画像流速)測定をした。

Table 1 Soccer balls used in this experiment

Name	Merlin	Telstar18	Krasava	Ordem	Finale	Vantaggio (Pimple)	NikeFlight
Design							
Fluid force	○	○	○	○	○	○	○
Groove measurement	○	○	○	○	○	○	○
2D-PIV	×	×	×	×	×	○	○
Name	Evopower	Delta	Jabulani	Tango12	Teamgeist	Vantaggio (Smooth)	Vantaggio (Dimple)
Design							
Fluid force	○	○	○	○	○	○	○
Groove measurement	○	○	○	○	○	○	○
2D-PIV	○	×	○	×	○	○	○

3. 結果と考察

3. 1. 流体力計測

図1は、各ボールの C_D 線図である。 Re 数は 1.0×10^5 から 2.4×10^5 の範囲でボールの抗力係数は約0.5から0.2に急速に変化する。これは、層流剥離から乱流剥離へのボール周りの流れの変化でありドラッグクライシスと呼ぶ。この現象を明らかにするために、ドラッグクライシスの開始 Re 数と終了 Re 数を start Re 、End Re として定義した。Evopowerはstart Re 、End Re はそれぞれ 1.0×10^5 及び 1.2×10^5 として最も小さい値であ

り、Jabulani では 1.8×10^5 及び 2.4×10^5 として最も大きい値だった。Evopower の周りの流れでは約 5 m/s で乱流になったが、Jabulani の周りの流れは約 12 m/s で乱流になった。他のボールもそれぞれ、start Re 、End Re が異なっていた。このことからボール溝は、層流境界層から乱流境界層への促進の要因となることがわかる。この現象の原因は、ボールのパネル形状の違いにあると考えた。

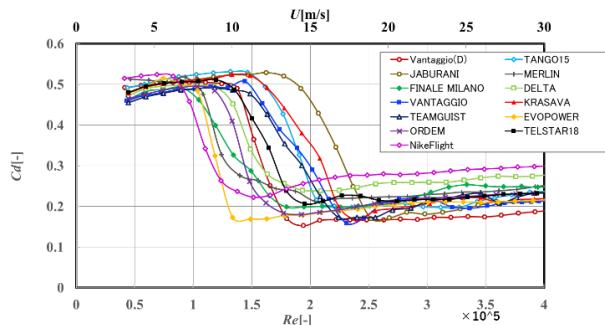


Fig.1 The C_D diagram of each ball

3. 2. 溝計測

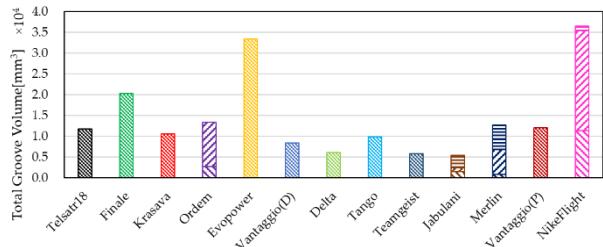


Fig.2 Results of groove volume measurements

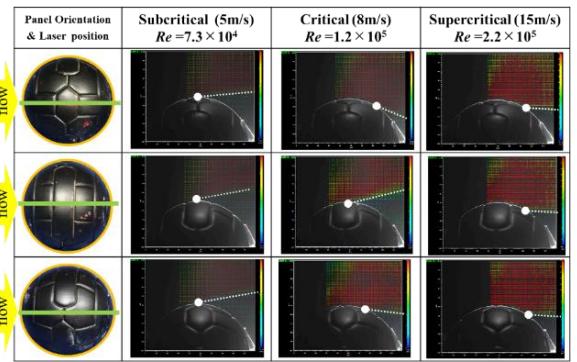
図 2 は各球種における総溝体積を示している。総溝体積と Start Re 数の相関係数は -0.72、総体積と End Re 数の相関係数は -0.84 であり、この傾向が非常に強いことを示している。

3. 3. 2D-PIV 計測

表 2 は Evopower の 2D-PIV の結果であり、左から順に亜臨界、臨界、超臨界領域であり、各図には剥離点と後流を示した。また、緑色の線はレーザー照射ラインである。ボールの左部分をボール中心から 0° と定義した場合、亜臨界領域では、 90° 付近で剥離した。図 1 の 1.0×10^5 未満のレイノルズ数の C_D は約 0.5 であり、 90° 付近で剥離した

ことから後流の幅が大きくなかった。一方、超臨界領域では 90° 以上で剥離点が見られ、図 7 のレイノルズ数が 1.2×10^5 以上では C_D が約 0.2 に小さくなかった。これはレイノルズ数が増加してボール溝が境界層を刺激し、境界層付近が乱流になったため、流れの剥離点が後方に移動し、後流の乱流幅が狭くなったからである。一方ドラッグクライシスでの流れでは、剥離点の位置と後流の流れ方向は、ボールパネルの向きによって異なった。これより、ドラッグクライシス最中ではパネルによって層流剥離と乱流剥離が混在し、ボール周りの流れが部分的に異なることがわかった。

Table 2 The 2D-PIV Results of the Evopower



参考文献

- [1] Alam, F., Chowdhury, H., Moria, H., Fuss, F. K. (2010). A comparative study of football aerodynamics, Procedia Eng, 2, pp. 2443-2448.